

【シンポジウム】

現代社会の諸相——曲がり角の向こう側——

司会 倉本香（大阪教育大学）

和田渡（阪南大学）

○ 趣旨

劇的に変貌していく現代社会。5Gの実現、Society 5.0は、何かのポイントを越えた、何かの曲がり角を完全に曲がったあの社会（ポスト・モダン）であるように感じられる。では、一体何のポイントを越えるのだろうか、どのような曲がり角を曲がっていくのだろうか。刻々と変貌しつつある「今の日本社会」で起きている特徴的な諸事象と哲学的思索をリンクさせ、この問題を考えてみたい。ポスト・モダン社会を否応なく到来させるのは、人々の意識の変化ではなく、テクノロジーの進化である。であるがゆえに、私たちの意識の中では、まだ近代的諸価値（例えば、主体性、自律、発展、合理性……）も同時に生きている。つまり、私たちの意識は社会の劇的な変貌にまだ充分追いついていないのだ。

本シンポジウムでは、現代の日本で起きている近代的な諸価値の再検討を迫られるようないくつかの具体的な事象を考察の俎上にあげる。遅れている私たちの意識によって「憂うべき現代社会の問題」として切り取られた断片が示すのは、ある側面から見ればそれほど問題ではなく、単に出来事を問題視する私たちの感性や知性が古いだけではないか、ということであって、これらの断片から、曲がり角の途中で足踏みしている我々がこわごわ向こう側の景色をのぞき込んでいる姿を自覚することを迫られるかもしれない。あるいは、これらの断片は、近代的諸価値のあらたな解釈の糸口であると言ってみることも、もしかすればできるかもしれない。本シンポジウムは、これらの断片によっていま私たちはすでに曲がり角を曲がってしまったという事実確認を迫られ、近代的価値やいくつかの概念様式の根底からの転換に直面しているのだ、という前提のもと、以下の二点を論点としたいと考える。

- ① 私たちの生活経験を可能にする様式の根本的な変化。概念の枠組みの変化について。「貧困化」という観点から語る。
- ② 具体的に「貧困化」は現代の日本社会でどのように現れているか、何が貧しいのか、それは貧しいのか、である。

この二点について、以下のフィールドをもって検討したい。

第一部 近代から現代へ

庭田茂吉（同志社大学）

近代社会から現代社会への移行を考えるために、三つの貧困の問題を取り上げる。

一つ目は、近代社会におけるいわゆる古典的貧困の問題である。すなわち、衣食住を初めとする物質的窮乏化としての貧困の問題である。エンゲルスの著作『イギリスにおける労働者階級の状態』(1845) で描かれた都市の労働者の悲惨な生活はその代表的な一例であろう。ただし、この著作には注意が必要である。資本制システム下におけるブルジョアジーとプロレタリアートとの階級対立に基づく貧困の問題を扱ったものだからである。確かに、この著作の狙いはエンゲルスのいう「社会的戦争」の帰結としての貧困の焦点化にある。しかし、それとは別に、違う読み方もできる。岩波文庫版の訳者解説で触れているように、労働者の生活史という一面である。「近年の歴史学会における社会史の隆盛にともない、一八、一九世紀の労働者の日常生活への関心が高まっている。社会史の一側面は、貧民ないし下層階級を対象とする歴史、より特殊には社会的抗議運動をあつかう歴史として捉えることができる。その点で、一九世紀初頭の労働者階級の日常生活を、衣食住の微細にわたって伝える『イギリスにおける

労働者階級の状態』は、すぐれた一九世紀社会史研究ともいえる。では、そこで描かれた貧しさとはどういうものか。飢える身体、苦しむ身体、病む身体、凍える身体、眠れない身体、汚れた身体、そして不幸な身体である。辛うじて「心と体をつなぎとめている」生活であり、「きょうは生きられていても、あすも生きていられるかどうかはまことに不確実であることを知っている」生活である。近代社会の古典的貧困概念と言われる所以であろう。

二つ目は、ベンヤミンの経験の貧困化としての貧困の問題である。今度は第一次世界大戦後の世界である。私はそこに現代社会の誕生を見る。科学技術の途方もない発展はわれわれに何をもたらしたか。フロイトはベンヤミンに先駆けて、既に、『文化の不安』(1930)において、科学技術によって、「神に類似するまでになりながら、今日の人間は自分が幸福だと思えない」と述べていた。今度はその三年後、ベンヤミンは、「経験と貧困」において、この「大衆の心理的貧困」に関して、それを単なる大衆の心理的な貧しさとしてではなく、この新たな貧しさを人類の経験そのものとして捉え直す。そこに何があったのか。ベンヤミンが問題にしたのは、経験という普遍的価値の失墜、あるいはその価値の下落である。では、ベンヤミンのいう経験とは何か。それは物語や金言や教訓話のような形で「指輪のように」、「たえず繰り返し年上の世代が年下の世代に受け継いできたもの」である。それは今や消滅した。なぜか。第一次世界大戦である。科学技術の途方もない発展である。戦場から帰還した兵士たちの沈黙がそれを物語っている。彼らは戦場で見聞きした出来事を語る術をもたない。それらの出来事は既知の経験をはるかに超え、自分たちの手持ちの経験では理解することができない。すなわち、経験の貧困化である。経験の相場の下落である。要するに、「戦争にまつわる出来事ほど徹底的に、経験というものの虚偽が暴かれたことはなかった」。では、この知恵の集積としての経験の消滅や伝統の喪失という事態、すなわち「経験の貧困化」にどのように対処すべきか。ベンヤミンの答えは、唯一残された「ちっぽけでもろい人間の身体」に従って、経験の貧困化の代償として唯一われわれの手中にある「アクチュアルなもの」、「新しい貧しさ」から始めること、ゼロから新たに開始すること、ガラクタから、廃墟から、本物を作り出すことである。

三つ目は、『象徴の貧困』(2004)である。今度はスティグレールの「象徴的貧困 (*misère symbolique*)」である。この象徴的貧困という言葉は、ベンヤミンのように、象徴と貧困、あるいは象徴の貧困化と言い換えたほうが分かりやすいかもしれない。《symbole》という語は、もともと二つに分けられたものが一つになることを意味する。スティグレールが象徴あるいは象徴的という語で考えているのは、「本源的ナルシシズム」としての自分が自分であることという事態である。しかし、初めから自分が自分であるわけではない。むしろ、自分が自分になるのである。それゆえ、重要なのは、この一つになることの過程にはかならない。スティグレールはこの自己実現の過程を「個体化の過程」と呼び、そこに現代の社会を覆う新たな貧困としての「象徴的貧困」という概念を導入する。つまり、この場合の貧しさとは、自分が自分であることとしての本源的ナルシシズムの破壊、自分が自分になれないという貧しさなのである。では、なぜそれが「象徴」の貧困と呼ばれるのか。それは、この自己実現はさまざまなシンボルの生産活動によってなされるからである。ただし、注意しなければならないのは、この活動は知的なそれだけではなく、感性的なものにも及ぶという点である。スティグレールによれば、現代社会の貧しさはこの生産活動の貧しさに起因する。それゆえ、その貧しさは「象徴的」と呼ばれるのである。シンボルという語の原義に照らして、自分が自分でないことから、すなわち、二つに分れた自分が最終的に一つになること、すなわち、自分が自己になること、それをいかにして実現するか、それがスティグレールの貧困論の要諦なのである。では、何がこうしたシンボルの生産活動の貧しさを作り出しているのか。問題は二つある。消費化と情報化である。消費する身体とメディア的身体である。それゆえ、これら二つの貧困化の過程こそが検討されなければならない。

以上のように、貧困の観点から、近代から現代への移行を見てきたが、各論では、消費化と情報化に翻弄される現代社会の諸相を詳しく見るために、三つの問題を取り上げる。すなわち、メディア、セクシャリティ（エロス）、教育の問題である。これらの考察を通して、われわれは曲がり角の向こう側の世界を垣間見ることになるだろう。その世界とは、それでも素敵なこの世界なのか、かくも不吉な新しい世界なのか。

第二部 それは貧しいのか豊かなのか

メディアをめぐる問題：メディアの発展とオタク文化

濱良祐（同志社大学）

マクルーハンによれば、あらゆるメディアは人間の何らかの心的ないし身体的な能力の拡張である。メディアの発展と多様化は我々の知覚を拡張するが、また同時に我々の認識様式と価値観の変更を迫ってくる。1960年代に注目を集めたこれらの主張の有効性は、情報通信技術がいまや5Gの時代を迎えるようとしている現代においてこそいっそう明らかになってきている。かつての電信の登場は世界中の人々が同時に情報を受け取ることを可能にし、さらにテレビの登場によって視覚的・聴覚的経験さえも共有されるようになった。こうしたメディアの発展はたしかに我々の経験のあり方を変更したが、これらの時代にはまだ情報の発信者という中心（マス・メディア）が存在した。しかし、情報通信技術の劇的な進化は個人が受信だけでなく同時に発信を行うことを可能にし、そのことによっていまや人間それぞれは一つの中心、一つのメディアとなっているように見える。こうした世界の中においては、コンテンツを作り出すことや特異な経験をすることよりも、〈インフルエンサー〉すなわち情報の媒介者であることが重要なステータスになりつつあり、〈特異な個人〉あるいは〈本来の自分〉などというものは意味を持たなくなってきた。

スティグレールが指摘しているように、テレビなどの視覚的・聴覚的メディアはマーケティングの手法によって各人の感性や欲望の特異性を消し去り、経験を画一化してしまった。そのことは特異的な存在である自己への愛を失わせ、さらには他者との友愛とそれにもとづく共同体を不可能なものにしてしまった。電子メディアにおける経験の貧困は、自己の喪失（「象徴の貧困」）を生むのである。このような自己の喪失とそれによる友愛の不可能さは、現代の主要メディアであるインターネット空間においても顕著に現れているように見える。その上で人々は自分と異なるものに配慮することもなく、それを理解しようとすることもなく、時には〈フェイクニュース〉によって傷つけることも厭わなくなっている。このような暴力性は、自己を喪失してしまった人間がインターネットによって極めて近い距離で生きるようになった（「グローバル・ヴィレッジ」）ことと無関係ではない。

では、人間はもはや自己を取り戻すことはできず、ただ野蛮化していくだけなのだろうか。ここで注視すべきなのはメディアの変化である。今のところ暴力性を拡大するように作用しているが、インターネットは新しいメディアであり別の可能性を持っている。上で述べたようにインターネットは我々の世界の中心となっていたものを消し去り、個々人を中心として世界を再構成する。こうした世界では、それ以前のメディアが持っていた画一化の力は弱められるはずである。自らをメディア化しようとする新しい人間は、画一化が弱まっていくことで生じる、多様な価値であふれかえる「ヴィレッジ」の中で新しい自己を創造しようとしている人間なのかもしれない。

平野啓一郎は新しい人間像として、「分人」を提唱している。「分人」として生きることは、旧来の「本来の自分」というモデルを捨て去り、他者との間柄の中で作られる多様な自分を受け入れつつ生きることである。我々は自己の喪失を嘆くよりも、新たなメディアにおける新たな自己を見出そうとするべきなのかもしれない。マクルーハンが「メディアはマッサージである」と述べているように、現代におけるメディアの発展は人間の自己のあり方や考え方をもみほぐし、新しい自己の可能性を開くものなのである。

セクシャリティ（エロス）をめぐる問題：愛なきセックスの新世界

樋口雄哉（同志社大学）

日本では2000年代後半以降、若者の、特に若い男性の「セックス離れ」が指摘されてきた。だが、現代の「セ

「セックス離れ」は、少なくとも男性の場合、性そのものからの脱却を意味しているわけではない。1981年から2017年に至るまで、性的な事柄に关心を持った経験がある男子大学生の割合はついに90%以上で推移している（上掲書、「若者の性」白書、p. 20）し、男子大学生の自慰行為経験率に注目すれば、2017年も約92%で、依然として高い（同書、p. 232）。これらも勘案すれば、「セックス離れ」の現象が示しているのは、性体験一般のうちで、異性とのセックスの地位が低下しつつあるという事実、またそれと並行して、オナニーを代表とするその他のセックス様式の地位が相対的に上昇しつつあるという事実だと言えるだろう。

他方、2020年に行われたある調査によれば、オナニーを行う男性の約80%が、オナニーの際に見るものとして、インターネット上の無料の実写アダルト動画を挙げているという（「全国男性自慰行為調査」）。近年は、PCやスマートフォンの普及、無料のアダルト動画共有サイトの普及により、以前に比べて、ずっと手軽にアダルト動画を視聴できるようになっている。今日では、こうしたサイトを利用しながら性器を弄ぶというのが、主要な性体験のひとつとなっている。

日本家族計画協会クリニックの北村邦夫は、「セックス離れ」の背景のひとつに、「セックスよりマスターーションのほうがいい」という風潮の広まりを見ている（『セックス嫌いな若者たち』）。こうした風潮は、北村の著作が暗に示しているように、二重の意味で、性の貧困化とみなすことも可能である。というのも「マスターーションのほうがいい」と感じている若者にとって、性体験はもはや一人きりでも可能な性器的快楽の体験に還元され、結婚と生殖から切り離されると同時に、異性との性愛からも切り離されてしまっているからである。

だが、このような性体験は果たして、単なる貧困化として、あるいは正常な性体験の欠如態としてみなされるべきものだろうか。今日的な性体験に見られる性の性器的なものへの局限化には、セックスの社会的意味からの解放が垣間見られないだろうか。本提題ではこのように問いかがら、とりわけ性器的なものと性愛的なものの分離に注目しつつ、今日的な性体験のもつ積極的意義について検討したい。

教育をめぐる問題：曲がり角の向こう側に立ち現れる教育

島田喜行（同志社大学）

本提題のねらいは、科学技術の発達と多様性の重視によって際立たされる現代社会において、私たちの生活の根幹に関わる「教育（学び）」という経験にどのような変化が生じているのかについて、「貧困」という視点から検討することである。

文部科学省は、2017年3月31日に学校教育法施行規則の一部改正とともに小学校・中学校学習指導要領の改訂を行った。『小学校学習指導要領（平成29年告示）解説 総則編』によれば、今回の改訂は、生産年齢人口の減少、少子高齢化、進展するグローバル化、人工知能（AI）に代表される技術革新などにより、日本が「予測が困難な時代」、「厳しい挑戦の時代」に入りつつある、という認識に起因するものである。この認識のもと、新しい学習指導要領では、子供たちが「予測困難な社会の変化に主体的に関わり、感性を豊かに働かせながら、どのような未来を創っていくのか」を自ら考えられるようになるために必要な教育の基本方針が示された。この基本方針において重視されることとは、「どのように社会や人生をよりよいものにしていくのか」という目的に向かって、子供たちが、「自ら考え、自らの可能性を發揮」しながら、「よりよい社会と幸福な人生の創り手となる力を身に付けられること」である。

このように、よりより社会と幸福な人生の創り手になるための「生きる力」や「資質・能力」を身に付けるための新たな教育課程を表現するキーワードが、「社会に開かれた教育課程」である。「社会に開かれた教育課程」とは、「これまでの学校教育の実践と蓄積を生かし」ながら、子供たちが未来社会を切り拓いていくために「求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携」しつつ、社会と「協働」していくことで実現される教育課程のことである。

ある。しかし、このキーワードとともに立ち現れてくる新たな「教育（学び）」は、私たちにどのような経験を与える、私たちの生にどのような変化をもたらすのだろうか。これが本提題の主導的問いである。

この主導的問い合わせるために、本提題では、「学校教育の役割（機能）とは何か」（第一の問い合わせ）と「教師の役割とは何か」（第二の問い合わせ）について考察したい。

まず、第一の問い合わせでは、シンポジウム第一部で展開されるベンヤミンの「知恵の集積としての経験の消滅や伝統の喪失」としての「経験の貧困化」を考察の手引きとする。いっそう具体的にいえば、現代の「教育（学び）」において、この意味での「貧困化」がどのように生じているのかを吟味するために、まず「ハイデイア」や「エデュケーション」の語義に立ち戻ることから始め、プラトンの「大切にしなければならないのは、ただ生きるということではなくて、善く生きるということなのだ」とカントの「人間は教育されなくてはならない唯一の被造物である」という古典的な教育観を見る。次に、現代の教育観として、ビースタ（Biesta, Gert, J. J.）の「資格化 qualification」「社会化 socialization」「個性化 individuation・主体化 subjectification」という「三つの次元」から成る複合的な営みとしての教育を確認する。

こうした教育観にくわえ、人工知能（AI）の開発過程から逆照射的に示される、これから学びの可能性を指摘した渡部信一の見解を取り上げ、「教科書や資料集に整然と整理されている」たんなる「事実的な知識」とは異なる「概念」形成の場（文部科学省『中学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間編』）、万人向けの「記録」という知識から個人の生を支える「記憶」という知恵を創造する場（渡部信一）、WEB検索で獲得可能な知のみならず、同時に、それでは獲得できないような知を修得する場（倉本香）を創設することが、新しい世界における「学校教育の役割（機能）」であるということを提言したい。

次に、第二の問い合わせでは、シンポジウム第一部で展開されるスティグレールの「自分が自分であることとしての本源的ナルシシズムの破壊」、「自分が自分になれないという貧しさ」としての「象徴的貧困」を考察の手引きとする。いっそう具体的にいえば、ロック（「正しい知性の導き手」）、フッサール（生に纏わる自明性に気付かせることができる者）、渡邊二郎（「人間の存在の必要条件と十分条件とを峻別すること」ができる者）、新茂之（「ほかの人との結びつきのなかにいることを自覚」させ、皆が「安心できる共同の場の醸成に積極的に参加しようとする姿勢が子どもたちに育つように援助する」ことができる者）、そして、ブレイディみかこ（たんなる「シンパシー（共感）」ではなく、「自分がその人の立場だったらどうだろうと想像することによって誰かの感情や立場を分から合う能力」である「エンパシー」の適切な育成に寄与することができる者）というさまざまな教師の在り方をみる。

こうした在り方の検討を通じて、自分が自分になれないという象徴的貧困と実存的空虚のうちに苦悩する子供たちに対して、そこから脱出するための新たな自己肯定への第一歩となる、「人間がある事実的状況を自分なりに捉え直し引き受ける不断の運動」（メルロー・ポンティ）としての「主体性」の意味を説き、「日常的な意識において抱く世界像（表象されるものとしての世界）では対処できない広大さ、非人間的な深さと暗さを湛えた他なるものとして」（篠原雅武）の世界を学ぶためのさまざまな経験を提供し、よりよい未来の創造を目指して、子供たちが「自分自身のためにはたらかせることになる能力」（ランシエール Rancière, J.）を身に付けられるように支援することが、新しい世界における「教師の役割」であるということを提言したい。